
一方通行が恋姫無双世界へGO！！

一方通行 G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一方通行が恋姫無双世界へGO!!

【Nコード】

N1913M

【作者名】

一方通行 G

【あらすじ】

ある日、一方通行が街をふらついていると
銅鏡を持った導師に襲われる
そうして新たな外史が生まれる

まことに申し訳ありませんが一身上の都合により連載を休止します
また、書く予定はありますので待っていて下さい

プロローグ（前書き）

こんにちわ

作者がド素人のため駄作ですがお許しください

プロローグ

「ああ、こっちは大丈夫だ。」 となにやらこの学園都市には場違いな修道服を着ている男が言う。

「へまをしないでくださいよ。」 どうやら誰かとはなしているようだ。

「フン、まかせておけ。もうすぐ回収が終わる。」

男は余裕そうであった。 すぐ近くに居た人の存在にも気づかずに・
・・

―――> 一方通行 side< - - - - -

一方通行は何気なく歩いていた。 あのツンツン頭の少年に負けてから何かを求めているように
さまよい続けていた。

「ああ、何やってんだろっなア。」

ふとつぶやく。

（あの野郎に負けてからずっとこの調子だ。胸糞悪リイ）

そんなことを思い浮かべていたら声が聞こえてきた。

「「ああ、こっちは大丈夫だ。」」

「「へまをしないでくださいよ。」」

「「フン、まかせておけ。もうすぐ回収が終わる。」」

そんな声が

（ハン、また何かの企みか？ 学園都市の連中もよくやりやがる）
と想像していたら男がこちらに気づいたようだ。

「お前、今の話聞いていたか？」

威嚇するような目をこちらに向けてくる。
その手には古臭い銅鏡があった。

（あん？あの銅鏡どこかで？確か学者どもが超能力とは別の力が宿
っているって言ってたけか？）

そんな思考を張り巡らしていると、

「おい、お前聞いているのか？」

「ああああ、聞いてますよ。つか、お前誰にそんな態度とってンのかわかってンのか？」

「フン、知らないな。しかし見られた以上には消えてもらおう!!」

いきなり蹴りかかってくる。しかし一方通行は平然としている。

蹴りが一方通行に当たったその瞬間、導師の体が吹き飛び足が折れていた。

「何だと？」

導師が驚いている。しかし次の瞬間われに振り返がついた持っていた銅鏡がないことに。

「しまった!!」

導師が驚いているときに一方通行は

(たく、何 面倒なことに巻き込まれてるんだか俺は。)

すると、割れている銅鏡が光始めた。

「はア？何なんだよこれは!!」

銅鏡の光は一方通行の体を包み込んでゆく。

「チツ、まあいいお前の開いたその外史で朽ちるがいい」

その言葉が聞こえたときに一方通行の意識は底に落ちてしまった。

プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか？

意見をどんどんいつてくらされば光栄です

第一話 恋姫無双の世界にやってきた（前書き）

駄作ですがどうぞお読みください

第一話 恋姫無双の世界にやってきた

―――＜一方通行 side>―――

「・・・つてなア。ここはどこだ？」

見渡すと

限りなく広がる荒野、青い空、遠くに見える山々・・・

「あの光に吸い込まれてから一体どれくらいたったんだア？」

携帯を見ると10分しかたつてなかった

（どうゆうことだ？10程度じゃアこんなところまでつれてくることなんてできねエ。

空間移動＜テレポート＞か？いやこんなに遠く飛ばせるわけがねエ。居たら

LEVEL5だろうからなア。俺が知らないわけがねエ。）

冷静に分析していく。すると何かが首についてることが分かった。

（チョーカー？何でこんなもんが首に？何かを頭に接続してるみてエだが）

能力を使ってみる。

一方通行の能力はベクトル操作、ベクトルがあれば運動量、熱量、電気量とわずに操作することができる

試しに風を操作してみる一方通行。

（何！！うまく操作できねエ。どうゆうことだ？）

どうやらうまく演算できなくなってしまったようだ
チョーカーをはずそうとしたが、

「くそ、はずれやしねエ！」

ベクトル操作ではずそうとしたが能力が打ち消される
そんなことをしているうちに頭の中に声が聞こえてきた。

「能力使用制限時間まで後20分です」

無機質な声が頭の中に響く。

（能力制限時間だと？つまり俺は能力を30程度しか使えねエって
ことか。

科学者どもめ俺に一体何しやがった！！）

すこし切れたがすぐに冷静になりチョーカーのスイッチを切った。

「バッテリーを通常使用モードに切り替え、充電を開始します。
12時間後にフル充電されます。」

無機質な声がする

（通常使用モードにしていれば充電できるってことか）

考えていると

い。

その攻撃を反射した、するとチビの腕の骨が折れた。

「があああああつあー！」

それを見たアニキとデクが呆然としているそして

二人は見てはいけないものを見てしまったかのように一方通行を見た
一方通行は無傷である二人は愕然としていた

「いい度胸だ、三下。お片づけの時間だ、10秒で終わらせてやる
ぜ。」

その後二人がどうなったのかは言うまでもない

第一話 恋姫無双の世界にやってきた（後書き）

感想、意見どんどん待ってます

第二話 一方通行 劉備達と契りを交わす（前書き）

一方通行の性格がすこしかわっています

第二話 一方通行 劉備達と契りを交わす

- - - - -> 一方通行 side> - - - - -

文字通り10秒で山賊を固片付けた一方通行
そこへ

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃんはやく」

少し近くから甘ったるい声が聞こえる。

「お待ちください桃香様。」

その後ろから凜々しい声が

「愛紗も桃香お姉ちゃんも待つのだ」

そのまた後ろから子供っぽい声が

3人の女たちがこちらにやってきた

「あ、いたいた。」

「あん？誰だお前？」

「誰だとは何だ貴様！！こちらに在らせられるは劉玄德様であらせ
られるぞ。」

「そう言われてもなア。」

（ン？待てよ、劉玄德って言ったら確か三国志に出てくる劉備ってやつじゃ

なかったか？どうなってやがるしかもあいつは男だろ？かといってこいつ等の

目は嘘を付いてるようには見えねエ。）

一方通行は学園都市最高の脳を使って考え始める。
そしてある結論を導き出す。

平行世界＜パラレルワールド＞

（たしかあの割れた銅鏡は別世界への入り口っていわれていたような？

ってことはこいつらの隣にいるのは関羽と張飛か？）

「おい、聞いているのか！！」

「ああ。聞ってる聞ってる」

一方通行は投げやりに答える

「貴様！！」

「まあまあ。落ち着いて愛紗ちゃん」

「そうそう。落ち着くのだ」

子供のやつが煩いやつを引き止めている

「すみませんうるさくて。私の名前は劉備です。それとこっちが」

暴れていたやつが落ち着いたのか

「わが名は関羽」

「鈴々の名前は張飛なのだ」

やっぱりだこの世界は平行世界だ

「ええと、あなたの名前は？」

「一方通行だ。」

一応、名前は答える

「あくせられーた？変わった名前ですね。」

変わってるのはお前達と一方通行は思う

「あア、聞くがここはどこだ？」

（ここが三国志の世界かを確かめねえとな）

「ここは幽州田啄郡。五台山の麓だ」

やはり。と一方通行は思う

「あなたが天の御使い様？」

「天の御使い？何のことだ？俺はアついさつき目覚めたばかりなんでなア

何もわからねエンだわ。」

「管路ちゃんっていう占い師に天より降りせし流星の中

白き髪に白き服を着た天の御使いがこの乱世を静めるものであるって言ってたから。それで流星を見かけて落ちたところにきたら

あなたがいたってわけ。」

「内容は大体理解した。お前らは俺に用があるから来たんだろう？俺になにを望むって言うんだ？」

「っ！！私達に力を貸してください！私達三人だけじゃもう何もできなく

なってるの官匪の横行、太守の暴政・・・そして弱い人間が群れをなし、

更に弱い人間を叩く。そういった負の連鎖が強大なうねりを帯びて、この

大陸を覆っている。」

少女たちの顔が少し暗くなっている

なぜだろう？おれはこの顔を見るのがつらい

「だから力を貸して欲しいのだ」

「天の御使いの力があれば挫けずにいけるだから！！」

「チッ、わかったよ。力を貸してやる」

（あア、自分には向かないことだってことはわかってるんだけどよう

何故かこいつ等のあんな顔だけはみたくなエンだ)

「ありがとうございます。では改めて私の名前は劉備、字は玄德、真名は桃香です。桃香って呼んでください。」

「わが名は関羽、字は雲長、真名は愛紗です。」

「鈴々ぼ名前は張飛、字は翼徳、真名は鈴々なのだ」

「これからよろしくねご主人様」

「あア、よろしく頼むぜ」

あア、確かに似合わねエと思いながら内面結構楽しんでたりする一方通行なのであった

最後、ご主人様という呼ばれ方に気が付いたが放っていくことにした

第二話 一方通行 劉備達と契りを交わす（後書き）

一方通行の性格が結構変わってますが許してください

間話 これからの方針

「ンで、これからどうすんだよ」

とこれからのことを聞く一方通行

「まずは資金や兵などを集めるところからでしょうか？」

「でもどうやって集めるのだ？」

「順当にいけばまずは名声を高めないとなア」

「そうですね。」

「でもどうやって？」

一方通行は持ち前の頭でいろいろ考えていた

（名声があつちじゃやばかったけどこつちじゃ役にたたねエからな。山賊を片っ端から叩き潰すか？それは時間がかかるな。・・・）

「どっかの客将にでもなつて功績立てるか？」

「ええ、それが今のところよさそうですね。このあたりでいえば公孫賛殿のところですかね？」

「公孫賛？公孫賛、公孫賛！あ、迫蓮ちゃんのところか！..」

「あン？知り合いか？」

「小さいとき塾が一緒だったの」

「桃香お姉ちゃん、なんでそんなこと忘れてたの？」

「忘れてないよ。………本当は忘れてたけど。」

（今なんか聞こえたようなきがしたがまあいい。しかし桃香に名前を忘れられるなんて同情するぜエ）
などと思いつつも

「だったら、早く公孫贄のところへいくぞ」

「はい。ご主人様」

ということでは一方通行たちは公孫贄のところへ歩き出した

第三話 公孫賛との開合（前書き）

みなさんたくさん意見ありがとうございます

分量が少ないとの意見がありましたのでいままでの二倍ぐらいにしてみましたが
ではどうぞ

第三話 公孫賛との開合

- - - - - 桃香 side - - - - -

私たちは三日ばかりで迫蓮ちゃんの城までたどり着いた。
そして迫蓮ちゃんに会いに行こうとすると、

「何だ！貴様たちは！！」

門を守っていた兵士の人に呼び止められてしまった。

「俺たちは公孫賛に用があんだよ。さっさと通せ。」

ご主人様はうざそうに兵士の人に言う

「何だ、その言い方は！！」

どうやら兵士の人は短気のような

あ、やばいかもご主人様が切れそうだよ

「てめエ、誰に向かってそんな口きいてんだだよ。殺・・・・・・・・」

ナイス、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん。

二人がご主人様を羽交い絞めにする。

よし、今のうちに

「ええと、私は劉備です。公孫賛さんに用がぁってきました。

名前を伝えてあげればしてもらえenと思います。」

そう兵士の人に言う

「は、わかりました。劉備様ですね。少しお待ちください。」

そういつて兵士の人が駆けていく

（それにしてもよかった。ご主人様が切れてたらあえなかったかも）

これからどうやって切れさせないようにするかを考えていた

- - - - - 一方通行 s i d e - - - - -

俺たちは少しばかり待ったあと公孫賛に会えることが決まった
さつき切れてた兵士がこちらを睨んでくる

（決めた。次に会ったらあいつを殺す）

そう心に誓いながら城の中へと入っていった

「おお！よく来たな桃香。」

何か玉座に座ってるけどめっちゃ脇役そつな奴が出迎えてくる

「久しぶり、迫蓮ちゃん。元気だった？」

桃香が再会を喜んでるようだ

（つてことあいつが公孫賛か？えらい普通っぽいのがきたなア）
と失礼なことを考えていると

「おい、そこのお前。今、失礼なことを考えてなかったか？」

睨みをきかせながら公孫賛が睨んでくる

「考えてませン。何も考えてねエなア」

一方通行が適当に答える

「ならいい。それで桃香たちはここへ何しに来たんだ？」

「えつとね、迫蓮ちゃん。私達、迫蓮ちゃんのところへ
仕官しにきたの。」

「おお！それは助かる。今、人材不足で困ってたんだ」

どうやらこいつはあまり人気がないらしい

「でも桃香なんで私のところなんだ？」

公孫賛が疑問を投げかける

当然である何せここよりいいところはたくさんある
曹操や孫策といった名将もいるのだから
そして桃香は

「迫蓮ちゃんのところが一番入りやすそうだったから」

あ、公孫賛の目から涙が出ている

（ひでエなアおい。確かにそうだけどう

面むかって言うもんじゃねエだろう）

と一方通行は天然の恐ろしさをしりながら公孫賛に同情するのだった
そして公孫賛は

「ああ悪かったな人気なくて何のとりえもなくてよおおおお」

城には悲痛の声が鳴り響いた

そうしたやり取りの後公孫賛が落ち着きを
取り戻すのを待ったあと本題に入った

「で、基本的に何すればいいんだア？」

「ん？そついえばお前誰だ？」

気づいてなかったのかよ

「俺は一方通行だ」

「一方通行？ああ、噂の天の御使いか。でもどうして桃香たちと一緒に？」

「深いわけがあんだよ」

一方通行としてはあまり深いわけでもないのだが
そして公孫贇は

「まあいい。では早速で悪いんだが一緒に黄巾党の討伐に参加してくれ」

（ああ、黄巾党か。確か曹操に滅ぼされるんじゃないか？）

「では二刻後に進軍するので用意しておいてくれ」

そのとき一方通行はいろいろと考えていた

この戦いを能力使用のテストにしてどれだけデータを取れるかについてを

（能力がどこまで使えるか確認しておかないとなア）

- - - - - 桃香 side - - - - -

戦闘が始まる前、桃香は迫蓮と話していた

「で、桃香。お前今まで何してたんだ？私はてっきりどこかで働いてると思ってたぞ。」

「ええと、ねえ。いろんなところで人助けしてたよ愛紗ちゃんと鈴々ちゃん
と一緒に。」

「お前いままでそんなことしてたのか？なんでどこかで働かなかったんだよ」

迫蓮ちゃんは何気なさそうに聞いてくる

「それじゃあ近くの人しか助けられないじゃない？だから旅をしながら人助けしてたの」

迫蓮ちゃんが呆れたような顔で言う

「まあ、桃香らしいっちゃあらしいんだが・・・そんであの天の御使いにあつたてのか？」

「うん。そうなの」

「まあいい、じゃあがんばって仕事してくれよ
桃香とその仲間には期待してるんだから」

そついつて迫蓮は部屋をでていく

（迫蓮ちゃんには借りができちゃったなあ。それだけ
期待もしてくれてるんだががんばらなくっちゃ」

決意を胸にひめ戦闘にそなえる

- - - - - 一方通行 s i d e - - - - -

桃香が公孫賛と話しているとき一方通行は
中庭で寝転がっていた

（俺は何で桃香たちに協力してんだろっア？）

そんなことを考えていた
するとそこへ愛紗が現れた

「ご主人様、こんなところにおられたのですか」

「あア。愛紗はなにしてた？」

「私は戦に備えての準備です」

そんなたわいもない話をしていると

「おや？こんなところにひとが？」

するとそこには白い服をきていかにも性格が曲がってそうな少女が立っていた
一方通行は

「あん？おめエは誰だ？」

「これは失敬。私の名前は趙雲。見たところせれなりの
武芸者のようだがお主たちは？」

「俺は一方通行だ」

「私は関羽。つい先ほど客将となられた劉備様の家臣だ」
すると趙雲は驚いた顔をしていった

「おや、それではあなたが噂の天の御使いか？」

「あア。そんな風にも呼ばれてるなア」

一方通行は心底どうでも良さそうだった

「そうでしたか。できれば一勝負よろしいですかな？」

一方通行は

（あア？何だこいつ、戦闘狂か何かか？）

などとりとどうでもいいようなこと考えていた

「待て待て、後一刻半ほどで戦なのだぞ。

今 力を使ってどうする」

と愛紗が止めに入ると

趙雲は少し残念そうな顔をしながら

「それもそうですね、では戦が終わったあとにいたしましょう」

そんな会話で時間が過ぎていく

第三話 公孫賛との開合（後書き）

どうでしたでしょうか？

意見があればどんどんください

第四話 一方通行 軍師に出会う(前書き)

今回は朱里と雛里がでてきます それではどうぞ

第四話 一方通行 軍師に出会う

一刻後

「我が軍はこれより黄巾党殲滅戦を開始する皆の者心してかかれ！」

「うおおおおお！」

すさまじい声が響き渡る

「いよいよだね、ご主人様」

そんなことを言うてくる桃香の足は震えている

「怖いのか？」

一方通行は問いかける

「うん、少しだけ。でも私もがんばらなくちゃ」

「そうか、だが辛くなったら引けよ」

「ご主人様……」

桃香は思い悩んでる様子だ
そこへ愛紗がやってきた

「桃香様、ご主人様、大丈夫ですか？」

心配そうに問いかけてくる愛紗

「あア、俺は大丈夫だなア」

俺は桃香の方を見る

「こいつがな」

「大丈夫ですか？桃香様」

「大丈夫だよ愛紗ちゃん」

こんなときでも笑顔を作ろうとする桃香

「本当に大丈夫。だって愛紗ちゃんも鈴々ちゃんも迫蓮ちゃんも
ご主人様だつてがんばってるんだもん私だけが休んでるなんてで
きないよ」

「桃香様……」

愛紗は本当に心配そうだと
そこへ鈴々もやってきた

「みんなそろそろ敵が見えるみたいなのだ」

どうやら報告しにきてくれたようだ

しかしその後ろから何か焦ってるような兵士が走ってきた

「報告します！民が数名逃げ遅れております」

その報告を受けて桃香が

「どうしよう、ご主人様」

困惑しているようだ

（だろなア、今すぐ助けに行きたいが軍をそれだけのためには動かせないからなア）

「チッ、おい鈴々何人かで俺について来い助けにいくぞ俺は先に行く」

一方通行はそういつてチョーカーのスイッチを入れた

「あとで追いついて来い」

一方通行はロケットのような速さで言ってしまった

――――――

「おばあちゃんがんばって」

二人の少女は必死になっておばあさんを助けようとしている

「もうあたしわ無理だよ。お嬢ちゃんたちは先におゆき」

「だめですよそんなの。私達はほかの人を助けたくて塾から飛び出してきたのに」

「そうかいそうかい。ならもう少しがんばるかな」

「みて！朱里ちゃん。向こうから何か来るよ」

その向こうから白い何かがちらに向かってきている
その直後背後から声がした

「このガキは売っぱらいでしょうか？」

背後には黄巾党の兵士がたっていた
いつの間にかおいつかれていたようだ
そして

「ババアのほうは殺すか？」

そういつて斧を振り落とす
おばあさんはもうためかと思った瞬間
兵士がふつとんだ

「クソゴミどもが、いい加減にしやがれ」

Side - - - - -
通行方 - - - - -

「クソゴミどもが、
いい加減にしやがれ」

そういつて一方通行は兵士をふつとばした
近くを見ると二人の少女が凄いいもの見るかの
ような目でみていた

そして背後から他の兵士が剣を振り下ろした

「死ねええええええええええ！！」

が、剣は一方通行をきることなくはじきとび兵士の腕が折れた

「殺すぞ、お前」

一方通行の赤い瞳が振り下ろしてきた兵士を捕らえる
その兵士はまるで鬼を見ているかのような目で逃げていった
他の兵士も同様だった

当たり前だ、剣を振り下ろしたのに傷ひとつつかないのにさらに剣が弾け飛びあげくには振り下ろしたほうの腕が折れたのだ。

逃げ出さないほうがおかしい
そこへ

「おにいちゃん」

鈴々の声が聞こえる

「おい、クソガキこいつ等を連れて本陣に戻れ」

「いいけど、おにいちゃんはどつするのだ？」

そんなこと決まっている

「俺はア、暴れて帰るから先にいつててくれ」

「わかったのだ」

そういつて鈴々たちが三人を保護したとき
二人の少女が

「待つてください！あなたが噂の天の御使い様ですか？」

「あア、そうだ」

一方通行はそっけなく答える

「私達を仲間に加えてください！」

「はア？」

一方通行は驚いた

それもそのはずこんな小さいやつが戦場に立ちたいなんてことを言うのだから

「私達は他の人々を助けるために塾を飛び出してきましただから多くの人の役に立ちたいんです」

二人の少女の目に揺るぎはない

（相当の覚悟を持つてゐることか）

一方通行は

「わかった。ならその力を証明してみろ。外見からみて軍師希望だろ？」

本陣にいつて力を発揮しろ。おい、クソガキこいつ等を頼んだぞ」

そついつて一方通行は敵陣のど真ん中に突っ込んだ

「5分だけ遊んでやる、かかってきやがれ」

一方通行はそういつて風のベクトルを操作し始めた

（圧縮は出来ねエ、なら風を束ねて・・・）

突風が吹くそれだけで五十人ほど吹き飛んだ

「まあまあか。もとの演算能力の十分の一にも及びもしねエ」

そんな不調をたれ流している一方通行だが

人が五十人も吹き飛ばすさまじい威力である

その威力のおかげで黄巾党は大混乱である

そのなか頭のような存在が

「くそ、あのやろうを殺っちまえ」

その声とともに矢が一方通行に向かって飛ぶ
だが一方通行にそんなものなど効きやしない
放った矢はすべて撃った本人に返ってきた
そしてある人物が言った

「化け物・・・・・・・・」

第四話 一方通行 軍師に出会う（後書き）

どうでしたでしょうか？

意見 感想 待ってます

第五話 軍師が仲間になる（前書き）

どうぞ およみください

第五話 軍師が仲間になる

- - - - - 公孫賛 side - - - - -

「おいおい、何なんだよあれは」

遠目で見てもわかるほど人が宙に飛んでいる

「あれが管路とか言う占い師がいつていた天の御使いかよ」

迫蓮が言っているのは前に尋ねてきた管路という

占い師の占いである

ちなみに占いの内容とは

「もうすぐこの世界に乱世を鎮める

白き髪に真紅の瞳の天の御使いが仲間とともに現れ

あなたを勝ちに導くことでしょう」

というものだった

いくら友達だったとはいえ桃香たちの事情を聞かずに
仕官を受け入れたにはこの占いによるものがおおきい

「たつく、これじゃ私の太守としての威厳はどこにいったんだか」

迫蓮はかなり落ち込んでいた

当然といえば当然である

太守よりも客将のほう活躍していたら兵や民に示しがつかないのだから

「はあ~~~~」

迫蓮は大きくため息をついた

しかしそんなことをしている暇はなくなっただけにせ敵が完全に混乱しているのである

どう軍を動かそうかと考えていると二人の少女がやってきた

「はわわわ、初めまして。諸葛亮でしゅ」

「鳳統でしゅ」

（か、噛んでる！）

迫蓮はそのことは口には出さずに尋ねた

「え〜と、諸葛亮に鳳統。君たちはいつたい何をしに着たんだい？」

「はい、天の御使い様に言われてきました。お前達の力を見せてみると」

（あいつ〜。客将なのに勝手なことしやがってしかも戦中に！！・・・でもよく考えてみれば無駄なことをするような奴に見えなかったし何かあるのか？）

そう思って迫蓮は二人の少女に聞いてみた

「お前たちは何ができるんだ？」

「私達が勝てる策を出して見せます」

（軍師がちょうど困ってたんだよね）

「なら、策を言ってみろ」

「はい。まず敵は今、混乱しています。相手の退路を塞ぎつつ本隊で叩き相手の戦う気だけを喪失させます」

「ふむ」

（なかなかのものだな）

迫蓮は関心しつつ細かい作戦などを聞いていく

「こうすれば、こちらの損害は少なくより高い戦果をあげれます」

「よし、ならそれでいこう！」

そうやって迫蓮は軍の指揮をとっていく

- - - 一方通行 s i d e - - -

「はアゝ。こんなモンですかア」

一方通行はつまらなさそうに敵を風で吹き飛ばしていく
時折矢を放ってくるも反射して敵を貫く

「チツ、そろそろ時間かア？」

（敵の混乱も作れたし、能力がどれくらい使えるのかも
わかった。でもよオ、いくらなんでもこれは下がりすぎじゃねエか
ア？）

そう思うのも無理はない本来の力が出せれば

この程度の数を殲滅するのに十分とかからないはずだ

しかし今は約五百の敵を倒すのに十分かかっている

能力の使用時間は十分しかない

フルで使っても千五百しか倒せないのだ

バッテリーが完全に充電できるまでの十二時間は

一切、能力を使用してはいけない

もし充電される前に一秒でも使用してしまえば

充電時間はリセットされ十二時間またなければいけないのだ

（能力にはあまり頼れねエってことか）

そう思っている間にどうやら主力が動き出したみたいだ

「さてと、戻るとするかア」

そうして黄巾党は諸葛亮と鳳統の策により討伐された
投降した者もいたが一方通行を見るなり
ガタガタと震え始めるものが多かった

「いやゝなかなかよかったぞ」

迫蓮は満足そうに言う

「今度もがんばってくれよ」

そうしてみんなは解散した

「いや、ご主人様、すごかったね」

桃香が輝いた目でみてる

「確かにそうですね、あそこまで人が宙に浮いているところなぞ見たことはありません」

「すごかったのだ、お兄ちゃんどうやったのだ？」

全員が聞いてくる

「あれはア、風のベクトルを操作しただけだ」

「べくとる？」

一方通行はめんどくさそうに言う

「ベクトルってのは、向きだ。要するに俺は方向性を操ってるんだ。

例えば、矢を放つだろ？そうすると矢は飛んでいつてる方へ

力が働いている。その力の向きを操作して逆方向、飛んで来たほうへ返したりしてるってことだ。その応用で風の向きと力を操作して

爆風に変えて攻撃してるってことだ」

みんな意味がよくわからないのか考え込んでしまっている
鈴々は

「よく分かんないけど、すごいってことだけはわかったのだ」

「まア、そう思っておけばいい」

するとみんなわけからないから考えるのをやめたようだ

「じゃあ、ご主人様は強いんだね」

「ああ、来る前の世界じゃあ最強だったからなア」

（あのツンツン頭のやろうに倒されるまでは）

そう思うをなんだかいらいらしてきた一方通行であった

すると二人の少女がやってきた

「すみません、よろしいですか？」

「うん、いいよ」

「あア、さっきのチビ二人じゃねエか」

「はわわわ、わ、私は諸葛亮といいましゅー！」

「あわわわ、わ、私は鳳統でしゅー」

「ふ、二人とも落ち着いてね」

「は、はい。しゅみません」

（また、？ンでやがる）

ため息が付きたくなるような上がり症な二人だった

「そついやア、仲間になりたいと言っただけか？」

「はい、そうなんでしゅ！」

「私達、人の役に立ちたくて」

「どうすんだ、桃香？」

「え、私？」

「俺はお前に手を貸してんだ。なら、お前が決めるべきだろう」

「なら、二人とも力を貸してくれる？」

「はい、がんばりましゅ」

「そつ、よかった。私は劉備、真名は桃香だよ。桃香ってよんでんね」

「我が名は関羽、真名は愛紗だ。よろしくたのむ」

「鈴々は張飛、真名は鈴々なのだ」

「俺は一方通行だ」

こうして桃香たちの仲間が二人増えたのである

そのころ迫蓮は

「え、私のところに来てくれたんじゃないの!?!」

と驚き泣いていた

第五話 軍師が仲間になる（後書き）

どうでしたでしょうか？

今度から少しだけ更新ペースが遅くなるかもしれませんが

第六話 義勇軍、進軍

その後一ヶ月間

俺たちは迫蓮のところで働き上々の働きを見せた
そんなある日、

「桃香たちにはここを出て行ってもらおう」

突然だった

「え？どうしてなの迫蓮ちゃん！！」

「それはだな」

「太守以上に活躍していたら面目が立たないんだろ？
太守以上の地位はないからなア」

迫蓮はそろそろ桃香たちの独立のときだと
ふんだんだろう

「まあ、そういうことだ。と、いうわけで
お前達はこれから義勇兵を募れ。」

私の軍の中にもお前達と戦いたい奴がいるそうだ」

「わかったよ、迫蓮ちゃん。」

そうして義勇軍を募り始めた

「で、それが何でこんなにいるんだよおおお！」

そこには約五千ぐらいだろうか
義勇軍に参加してくれる者たちがいた

「よっぽど、人気がなかったんだなア」

一方通行は同情しつつ言う

「はわわわ、まさかこれだけいるとは思いませんでした」

朱里の驚いているようだ

「いったいどれくらいだと思ってたんだア？」

二人の軍師に聞く

「に、二千も集まればいいぐらいかと・・・」

雛里が答える

「もういわないでくれ。悲しくなってくるから」

後ろで迫蓮が落ち込んでいる。
今にも泣きそうだ。

そこへ桃香たちもやってきた

「すごい、人がたくさん」

「たくさんいるのだ！これみんな鈴々たちの仲間になるのだ？」

「ああ、そうだと鈴々。それにしてもさすが桃香様。人望が厚くていらっしゃる」

愛紗が迫蓮がいるのも知らずに言う
そしてその言葉を聞いた迫蓮は泣き出してしまった

「どうせ私なんか人望も力もありませんよ」

かなり卑屈になっている
一方通行が、

「早く独立させてよかったなア。このまま
桃香を置いていたら国のつとられてンじゃねえの？」

「ああ、早く独立させてよかった」

そしてこの日、義勇軍が結成された

「ねえねえ、ご主人様」

「あア？何だ？」

「これからいったいどうするの？」

「それはこの二人にでも聞け」

朱里と雛里に任せる

「はい、私達はまだ弱小勢力なので黄巾党でも比較的、弱い部隊を倒しつつ名声をあげることが一番かと」

「食料はどうするつもりだ？」

愛紗が問いかける

「各地の豪族に寄付を募るか、敵の補給部隊を叩いて確保するしかありませんね」

「まア、そんなとこだろ。反論はあるか？」

一方通行はみんなに問う

「ぜんぜん、いいよ」

「それでかまいません」

「鈴々は何でもいいのだ」

「じゃあ、そろそろ出発するかア」

こうして

迫蓮と趙雲に別れをつげ意気揚々と出陣した

どこまでも広がりそうな荒野を進軍しながら、
各方面に細作を放って黄巾党の動向を探る
たいていのことは朱里と雛里がやっている
だから一方通行は

「暇だなア、おい」

「ご主人様、気を抜きすぎです」

愛紗が説教じみたことをいつてくる

「実際、暇なんだからよオ」

とそこへ

「申し上げます！」

前方から走ってきた兵士が俺達の前で跪く

「ここより前方五里のところに、黄巾党らしき集団が陣を構えております！その数、約一万！」

「やつとか、久々に暴れるぜエ」

一方通行は暴れられなくてイライラしていた

「ま、待ってください。いくらご主人様がいると言っても約二倍の兵力差で正面からだなんて」

「じゃあ、策を出してみろ」

「はい、この先五里というと兵法でいう衢地になつてます」

「くちー？なんなのだ、それ？」

「衢地とは、各方面に伸びた道が収束する場所のことを言っんです」

「つまり交通の要所ってやつかア」

そこに兵や物資を配備しておけば、各方面に進軍している部隊に素早く補給物資を送ることができる

「はっ、そんなとこに一万しか配置しないってことはあほだな」

「そうですね。だからこそ、私達のねらい目はそこかと」

「どういうこと？」

いまだにわかっていない桃香

「敵は私達よりも多くの兵を持つとはいえ、
雑兵ではありません。またその雑兵が守って
いる地は黄巾党全軍に影響を及ぼすであろう重要な地」

「そこを破れば、私達の名は否応なく高まります。
だからこそ、これは千載一遇の好機」

「更に言えば、私達の兵は敵よりもかなり少ない。
そんな敵が前に現れたとしても敵は恐れないでしょう。
……そこが付け目なんです」

「なるほど。敵を油断させ、策を持って破る。
そう言いたいのだな？」

愛紗は関心した目で雛里をみた

「は、はひっ！」

「……そんなに緊張しないでほしいのだが」

「あわわ……ごめんなさいです……」

愛紗はすごく自分はそんなに怖いだろうかと

真剣に落ち込んでいる

「もう何でもいいので戦いたいのだ」

鈴々がしびれを切らしたようだ

「で、朱里その策つてのはどんなんだ？

「そうですね……。まずは敵を陣地から引っ張りますこと」

「その後に野戦に持ち込むこと。……ただし平地で対峙してはいけないこと」

「数で負けてるなら、数で負けない状況を作りだせば良いんです」

「ようするに、道が狭くなっているところで戦えってことかア？」

「はい、そうです」

「先に言われちゃいました」

「すごいね、ご主人様。どうやら正解みたいだよ」

桃香が憧れのまなざしをむけてくる

「こんなもん少し考えれば誰にでもわかんだろ」

「しかし、どこにも道が狭くなっているところ
なんかないぞ?」

愛紗がもつともなことを言う

「あ、ありますよ?」

「ここより北東に二里ほどいったところに、
川が干上がってできた谷があります」

「ええっ?でも地図にはそんなところ載ってないよ?」

桃香が驚きの声を上げる

(そういえば、そんなもんなかったなア)

一方通行は自分の頭に記憶している地図を
読み返した

一方通行の頭はスパコン並で一度記憶すれば忘れない
のだ

「そ、それ市販のものですよね?」

「う、うん。お店に売ってたヤツだけど……」

「なら、正確な地図ではないですね」

「え、そうなのだー?」

「……じゃあこの地図って偽者?」

「ンなわけあるか。いらないうところが省かれているだけだ」

「そうです。市販の地図には旅人や商人がよく使う道とか、山とかしか書いてないってだけです」

「なるほど。人々がよく通る道だけ書いておけば、地図としての役割は果たせるということか」

愛紗が結論にたどり着いたようだ

「はい、正確な地図は漢王朝や官軍しかもってないんです。地図は戦略戦術を決定する上で一番大きな要素となります。地理に詳しくないと作戦はたてられませんから……」

「最近では、力をつけた地方の諸侯も、独自の力で地図を作ってるみたいです。

多分、公孫賛さんはそこまで気が回ってなかったのかも……」

「迫蓮ちゃんって時々、そういう大ボカをやらかすんだもんなあ……」

ひどいいわれようだ

多分、迫蓮も桃香には言われたくないだろう

「お姉ちゃんが言うんなのだ」

鈴々の一言で笑いが起きる

「私達は正確な地図を見えますからおおよその地理は覚えてますよ」

「覚えてるって大陸の地理すべてを覚えているのか!？」

愛紗が驚きの声を上げる

(当たり前か、普通の人間ならできねえだろうな。

この二人、計算などだけならLV5級じゃねエかア?)

一方通行も心のなかで関心している

「とりあえず、敵の構築する陣の前で全軍で姿を現して・・・後は逃げるだけです」

「敵に追尾させるということか・・・」

「そういうことです」

「よし、作戦は決まったなア?

愛紗は前衛を率いて状況に応じて反転、峽間を目指す。鈴々は護衛」

「えー。鈴々が先陣をきりたいのだ」

「だめだ。愛紗が反転した後、移動する部隊を守らなくちゃあいけないからなア」

「むー。しかたないのだ」

「朱里は鈴々の補佐につけ」

「わかりました」

「桃香は当然本陣だ。補佐に雛里をつける」

「はい！」

「お兄ちゃんはどうするのだ？」

「俺は、愛紗の部隊の反転にあわせて敵を混乱させる」

「進軍開始だ！」

第六話 義勇軍、進軍（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想 意見 お待ちしています

これから更新ペースが遅くなるかもしれませんが
よろしく願います

第七話 黄巾党補給部隊、壊滅

荒野に吹き抜ける風に旗をなびかせ、
威風堂々と進軍していく

「前方、黄巾党陣地に動きあり！」

進軍すると同時に放っておいた斥候が
報告に戻ってくる

「分かったア」

「それでは！全軍戦闘態勢を取れ！作戦は先ほど
通達したとおりだ！」

「まずは初撃をいなししてから、隙を見て転進！
この場から後退するのだ！」

「ここより二里先に峽間がある！
そこへ退くまでは戦いを避けて移動する！
各員、我らの指示を聞き逃すなよ！！」

「「「「「おおおおおお！！」「」「」「」

兵士達の声が荒野に響く

「敵陣開門！来ます！」

「いよいよ戦闘の幕開けだア。死ぬなよ」

一方通行が桃香たちに声をかける

「分かっていますよ」

「鈴々は強いから死なないのだ」

愛紗と鈴々がしつかりと答える

「そうかア」

「では・・・勇敢なる戦士達よ！我につづけえええー！！！」

愛紗の雄たけびと共に咆哮した兵士達が

敵に向かって突進していく

そんな俺達の動きに合わせるように、前方で土煙が舞うやがて・・・両軍が激突した

「死ね！死ね！死ね！死ねーっ！」

黄巾党の兵の声が

「うおおおおっ！死ねこの野郎！」

言い返す義勇軍の兵

戦場各地で巻き起こる、激しい罵りあいと
剣と剣がぶつかる音に、叫び声

どこかで絶叫がおこるたび、鮮血が空に舞う
目の前で繰り広げられる、殺し合い

一方通行は今までに一万人以上の人間を殺してきている
しかし一方通行は

（何でよオ、殺しあってるンだろうな）

一万人以上殺してきておいてそんなことを言っている

一方通行は本当には妹達を殺したくなかった

人を傷つけるのがいやだった

しかし、そのための方法が思いつかなかった

そのときに

最強ではなく無敵になれば誰も傷つけずにすむと考えた

だが、その結果一方通行は一万人以上のクローンを殺すはめになった
これも同じである。

平和を作るためには仇名す者を殺せねばならない

根本的なところはおなじなのだ

（結局は、何かがしたいならそれだけのものを奪わないといけない
のか）

一方通行は世界の不条理に苛立ちを覚えた

「だが、だからと言って負けるわけにはいかねえなア」

そのとき愛紗の部隊が後退し始めた

- - - - - ??? side - - - - -

とある軍の内部なかでおこっている戦いのことが話されていた

「華琳様。西方に砂塵を確認しました。

．．．．．おそらく黄巾党とどこかの軍が戦っているのだと思われる
ます」

華琳と呼ばれたどこか威厳のある少女が答える

「そう。この辺りの敵に目を付けたとなるとその部隊、
官軍ではなさそうね」

「恐らくは．．．．．主戦場より離れた地であるのに、
策略上、重要な拠点となりうるこの場所に目をつけるなど、
愚昧な官軍にできるはずがありません」

冷静そうな女性が答える

「諸侯の中にも、なかなか見所のある人物が居るという
ことでしょうか」

すると華琳という少女は

「ふむ．．．．．一度顔を見てみたいわね」

と興味深そうな目で言う

「向かいますか？」

「そうね。だけどまずは目の前のことを
終わらせましょう。・・・春蘭」

「はっ！」

「秋蘭」

「は・・・」

すると華琳は冷たい目になって

「鶯のなっていないケダモノに、恐怖というものを
教えてあげなさい」

「「御意！」」

- - - side out - - -

「さあてと、そろそろ行くかア？」

一方通行はやる気のなさそうにつぶやく
そろそろ峡間に敵の部隊がほとんど入るころだ
そして合図がおくられてくる

「行くかア！！」

一方通行はチョーカーを能力使用モードにし
風を操り、一気に敵を吹き飛ばした

一方通行も演算に慣れてきたので最初と比べると
かなり威力が上がっていた

敵がごみのように飛んでいく

そして一方通行は敵のど真ん中に突っ込み

「降参するヤツはさっさと武器を置きやがれエ！」

そして一方的な戦いが始める

- - - - - 桃香 side - - - - -

「あわわ。うまくいきすぎなぐらいうまく行きましたねえ」

「ねえ、雛里ちゃん。」

「はい、何でしょう？」

「そろそろ、軍を反転しなくいいの？」

「あわわわっ！わ、忘れてました！」

（うーん、やっぱり）

「全軍反転。一気に倒しちゃうよ」

「「「「おおおおおおお!!!!!!」」」」

「- - - - - 華琳 side - - - - -」

「何なの、あれは!?!」

華琳が驚愕の声を上げる

前を見ると一人の男が単身で突撃したと

思ったら、黄巾の兵が吹き飛び宙を舞ったのだ

「あれは、噂の天の御使いかしら？」

「恐らくは」

「ほしいわね、あの力……」

そんな欲望が込みあがってきた華琳だった

「- - - - - 一方通行 side - - - - -」

「はン、口ほどにもねエ」

一方通行は言った

来る斬撃、矢は反射しこちらは風を操作して

敵を吹き飛ばす

敵は戦意喪失気味だ

そこへ雄たけびが上がった

どうやら本隊が反転し一気に攻めに入っただろうだ
敵は混乱し、次第に投降するもの、逃げるものが
現れ始めた

そして間もなく黄巾党の部隊は壊滅した

第七話 黄巾党補給部隊、壊滅（後書き）

読んでくださってありがとうございます

感想 意見 お待ちしております

第八話 曹操との会談

黄巾党を追い払った俺達は、放置された陣地へ侵入した

「敗残兵がまだ残っているかもしれん。各員、警戒を怠らず陣地内をくまなく調査しろ！」

「見つけた物資には手を付けず、すぐに報告してくださいね」

二人の指示が飛ぶ

「「応っ！」」

二人の指示を受け、兵士たちが陣地の奥に散っていく

「これでしばらくは大丈夫ですかね」

「そうだね。みんなご苦労様でした」

桃香がみんなに向かって感謝の言葉をいう

「桃香様こそ。本陣の指揮、お疲れ様でした」

「天然なお姉ちゃんにしては、なかなかの指揮だったのだ」

鈴々がなかなか酷いことを言う

「うぐ……ほ、殆ど雛里ちゃんのお陰だったり

するんだけどね、あはは・・・どうせ私は頼り無いですよ」

桃香はさっきの発言でかなり落ち込んでいるようだ

「それなら朱里もすごかったのだ」

「はわっ！？わたしですか！？」

「朱里のお陰で鈴々は指揮しなく済んだから、
すごく楽できたのだ」

「はわわ、鈴々ちゃんもすごく強くて頼もしくてすごかったですよ
お」

「鈴々が強いのは当たり前なのだ」

鈴々が調子に乗ってくると愛紗が

「こら、鈴々。あまり調子に乗るなよ」

鈴々は不満げに、

「でも、鈴々が強いのは事実なのだ」

「そうは言ってもだな」

愛紗の説教が始まった

そんな二人を放って置いて桃香、朱里、雛里は
話を続ける

「それでもやつぱり一番ご主人様が凄かったよね」

「はい、遠目で見ても人が空を飛んでいるのがわかりました」

「ご主人様が突撃した当たりから敵がかなり混乱していたのが一目瞭然でしたからねえ」

「あの力があれば私達いらないんじゃないか」

二人の軍師が落ち込み始める
すると、桃香が慌ててフォローする

「で、でも前にあの力はあまり使えないって言ってたよ」

「それでもあれだけ軍が混乱すれば策はいらないと
思うんですけど」

どんどんマイナス思考になる二人

「そ、そういえばご主人様は？」

「そういえばどこへ？」

ふと話している人物が居ない事に気が付く

「ねえねえ、愛紗ちゃん。ご主人様がどこにいるか知らない？」

「え、ご主人様ですか？たしか……ああ、寝てくるって言
って

ましたよ」

「ご主人様・・・敵がまだ居るかも知れないのになるって」

どこまでも自由な一方通行だった
そこへ慌てた様子の兵士が現れた

「申し上げます!!」

「どうしたのだ」

「はっ。陣地の南方に官軍らしき軍団が現れ、我らの
部隊の指揮官にお会いしたいと・・・・・・・・どうしますか？」

「官軍らしき、とはどういうことだ？」

愛紗が訝しげに聞く

「それが・・・通常、官軍が使用する旗を用いずに曹と
書かれた旗を掲げているのです」

「官軍を名乗りながら、官軍の旗を用いず。
・・・・恐らくは黄巾党征伐に乗り出した諸侯ですね：」

朱里が丁寧に答える

「曹と言えば許昌を中心に勢力を伸ばしている曹操さんかと」

「その曹操さんって味方なの？」

「たぶん・・・曹操さんはあまり卑怯なまねはしないと聞きますから」

朱里が自信なさげに答える

「じゃあ挨拶に行かなきゃ。愛紗ちゃん、ご主人様を起こしてきてくれる？」

「はい、分かりました」

愛紗は天幕の方へ走っていく

「ならさきに挨拶に行こうか」

「はいでしゅ！」

緊張したのか噛んでしまったようだ

「いえ、その必要は無いわ」

行こうとした時、前には金髪の頭の人がいた

「えーと、あなたが曹操さん？」

「そうだ。こちらが曹猛徳さまであらせられる」

横の黒髪の人言う

「我が名は曹操。官軍に請われ、黄巾党を征伐するために軍を率いて転戦している人間よ」

「こ、こんにちは。私は劉備って言います」

桃香が少し戸惑いながら自己紹介する

「劉備。・・・いい名前ね。

あなたがこの軍を率いてたの？」

「ええと、私がでいいのかな？」

「どういうこと？」

曹操が不思議そうに聞く

「ええと、説明しますね。

私達には現在二名に指揮官がいらっしやいます。

桃香様ともう一人は

「

朱里が説明しているとそこへ

「誰だア？この金髪クルクルチビガキは」

一方通行がきて、とんでもない発言をした

「き、貴様あ！華琳様に向かって何たる暴言！
その首切り落としてくれる！！！」

黒髪の人が激昂する

「何だよ、やる気かア？」

一方通行も戦闘態勢に入る

「はわわわっ！ど、どうしましょう！」

桃香が止めに行こうとすると
それを曹操が止めた

「あれが、噂の天の御使い？」

「そうですよ、あれが私達のご主人様。
でもいいんですか？止めなくて」

曹操は悪そうな顔をして

「ええ、私は私の軍最高の武将、夏侯元讓とどこまで
戦えるか見てみたいのよ」

そして二人は戦いを始める

「うおおおおお！！！！」

夏侯惇が剣を振り下ろす

しかし一方通行はよけない

桃香たちを除く魏のメンバーは彼が死んだと思った

だが、剣が一方通行の首に当たった瞬間、剣のほうのはじけとんだ

「「なっ！？」」

魏のメンバーは目の前におこった現象を正確に把握できていないようだ

さしもの名将達もこんなことは経験したことが無いだろう
そして一方通行は剣を失った夏侯惇に近づき

「お前の負けだ三下ア」

そういつて夏侯惇に触れた

その瞬間夏侯惇は崩れ落ちた

一方通行が生態電気を操作して気絶させたのだ
その光景を目にした曹操は

（な、なんて力なの！あの力があれば私の霸道への
道はさらに一歩進むことできるわ）

「ねえ、あなた名前は？」

「あん？人に名前を聞くときは自分から名乗るもんだろう？

一方通行は威嚇しまくりの目でにらみつけた

「これは、失礼。私の名前は曹操」

「俺は一方通行だ」

「当然だけど、あなた私のところにこない？」

いきなり曹操は一方通行を勧誘した

「な、なにをいきなりいつてるんですか！！」

桃香が口を挟む

「お黙りなさい！私は今、彼に聞いているの！」

そして一方通行は

「誰が行くかつつうの。残念ながら先約があるんでね
それによろ、お前うつとうしいンだわ」

「そう、ならしかたないわね。

でも、覚えておきなさい！私はほしい物は必ず手に入れる
主義なの」

「そうかよオ」

「劉備、またね。次に会うときは敵同士かもしれないけれど」

そついい残して曹操たちは自分達の軍へと帰っていった

第八話 曹操との会談（後書き）

意見 感想まっています

更新ペースが遅くなるのでごめなさい

第九話 趙雲 仲間になる（前書き）

PCが壊れているのネットに繋がらず更新が遅くなりました
まことに申し訳ありませんでした

第九話 趙雲 仲間になる

曹操たちと分かれてから数ヶ月間は黄巾党征伐に明け暮れた
そして桃香たちはいっぱしの戦闘指揮官へと成長していった
一方通行はこの世界の文化や常識、諸侯の動きなどを
学び彼もまた成長していった

劉備軍は乱鎮圧の恩賞に帝から平原の相に任命され
初体験の連続に、周囲の状況に気を配る余裕もなかった
その初体験とは街を治めるといって、責任のある仕事だった

「きょくも楽しくみつまわりだあ」

桃香がご機嫌なようで楽しそうに見回りをしていた
一方通行は

「何で俺がこんな事しなくちゃならねえんだ？」

かすかに切れぎみな一方通行
そんな一方通行に桃香は

「仕方ないですよ。やっと乱も終わりましたし
今度はみんなの安全を守らないといけませんから」

「俺はそういうことを言ってるんじゃないか！
どうして俺が巡回しなくちゃならないかを聞いてるんだ」

一方通行はこういった面倒な事はやりたくない主義なのである

「それはあゝ人手が足りないからですよあ」

桃香はまともな事を言う

さしもの一方通行でも現実を突きつけられたら反論できない
一方通行も国の人材不足は十分理解していた

「チッ」

一方通行は軽く舌打ちをする

一方通行がさらにイライラしていたところに
朱里がやってきた

「ご主人様ー、桃香様ー。

はあ、はあ、はあ…… やつと見つかりましたあ」

「朱里ちゃん？何かあったの？」

「えつとですね、すぐにお城に戻ってもらって良いですか？」

何か少し慌てているようだ

「何だア？何かあったのか？」

「実はお城に、お二人を尋ねて来た方が……」

「お客さん？」

「はい、公孫賛さんの所にいた趙雲さんを
覚えてますか？」

「あのいかにも腹黒そうなヤツか」

一方通行はおぼろげに趙雲のことを思い出した
桃香が話を進める

「迫蓮ちゃんの使者として来たのかな？」

「いや案外、公孫賛の野郎に愛想をつかして来たのかも
しれねエぜ」

一方通行が酷いことを言う

「それはいくらなんでも……いやあるかもしれないね」

桃香までもがそれに賛同し始める

「と、とにかく、城に戻りましょう」

「星ちゃんっ」

「おお、これは桃香殿。久方ぶりですな」

いつの間にか桃香は趙雲に真名を許しているようだ

「ホント、久しぶりだねー」

「我らの旗揚げ以来になりますから半年ぶり、ということになりますね」

「久しぶりなのだ。星、元気だったかー？」

愛紗や鈴々も趙雲との再会を喜んでいる様子だ

「お陰様でな。息災だった。……そちらの方もなかなかの活躍ぶりだったな。各地の街でえらく評判になっていたぞ」

「ほんと？へへ、頑張った甲斐があつたね」

「で、お前はここへ何をしにきた？」

一方通行は鋭い眼差しで言う

「ふふつ、相変わらずすな。

黄巾の乱が収束に向かいだしたところに伯珪殿から暇を貰い、各地を放浪しておりました」

「放浪？お主ほどの人物が何故そのような真似を。探せばいくらでも士官先はあるだろうに」

「私は安くないのでな。我が剣を預ける人物を我が目、我が耳で見つけ出していたのだ」

「それで見つかったのかー？」

「ふむ。それがなかなかだな。主となる器量と徳、そして周囲に居る人間の質。この三つを兼ね備える勢力は少なかった」

「少なかったということは、いくつかは見つけたってこと？」

「一応は。しかしどの陣営も肌に合わぬところがあったのです。だからこうして放浪していたというわけで」

「だから、ここへ来たってかア？」

今、俺達の軍は急成長している。このまま行けば大勢力になるのはそんなに遠くはないからなア」

一方通行が趙雲がここにきた理由を先に推測した

「そのとおりです。そしてあのときの約束を果たしてもらおうと思ひまして」

約束というのは一対一で戦うということである

「いいぜエ。さっきからイライラしっぱなしだったんだ
ストレス発散に付き合ってもらうぜ」

一方通行は殺る気だ

「ではいきましょうか」

城の中庭に出てきた趙雲と一方通行

「さっさとこいよ」

「よろしいのですかな？」

質問は当然である

一方通行は武器を持っていないそれでどうやって戦うというのか

「二度言わせんな」

「そうですかではっ！！」

趙雲が一気に間合いをつめる

そして渾身の一撃を一方通行に浴びせる

趙雲はこのとき疑問に感じていた何故、攻撃を
よけないのだろうと

決定的な敗因は趙雲が一方通行の戦いを一度も見えていなかったことだ
そして趙雲の武器の龍牙が一方通行にあたる

ガキン！！

その音と共に龍牙が空に舞った

「なっ！！」

「これで終わりだ」

一方通行は趙雲に触れ生体電気を乱して気絶させようとした
それを趙雲は寸前のところでよけた
それは感でしかなかった

普通触れただけでどうなるものでもない
しかし趙雲は危険を感じ避けたのだ

「ハッ！！今までそれでやられなかつたヤツは居なかつたぜ」

「それはどうも。しかし私はもう戦えませんね」

このとき趙雲の腕は反射の衝撃を受けきつたが完全に
麻痺していて戦うどころではなかった

「私の負けです。しかし、やはり以前候補に入れておいた
だけがありましたな。決めました、私はあなたにお使えます。」

「お前はそれでいいのか？」

「ええ、これは紛れもない本心です、主。
我が名は趙雲、真名は星です」

「そうか、おい桃香。こいつ
今日から俺らの仲間だ」

一方通行は意外と素直にそのことをうけいれた
以前の一方通行だったら「くだらねエ」と
一蹴していたところだがこの世界に来て性格が柔らかくなったようだ
一方通行はこの世界で守るものがあることはいいことだとしての

かもしれない

そして、劉備軍は星を加えさらに強くなった

第九話 趙雲 仲間になる（後書き）

今も壊れているので更新できないかもしれません

第十話 反董卓連合参加！！（前書き）

こんばんわ

どんどん更新ペースが遅くなってますがゆるしてください

第十話 反董卓連合参加！！

新たな仲間を加え、初めての内政に精を出しているころ
この世界では大陸の運命を左右する出来事が起きていた

漢の皇帝、霊帝の死である

この国の支配者が死んだことで、黄巾の乱から朝廷内に燻っていた権力争いが具現化した

朝廷内を牛耳っていた官軍・十常侍と、軍部を握る軍人とが、自らの懐中にある皇太子を即位させるために

血で血を洗う権力闘争が勃発したのだ

霊帝の崩御に伴い、その妻とその兄である何進によって
擁立された弁太子こと少帝弁

そして官軍一派と霊帝の母である董太后に擁立された、

聡明と評判の高い次子、劉協

この即位は弁に決まったが十常侍たちが黙ってはいない
十常侍は何進を呼び出し暗殺

その後、何太后を洛陽から追放の後、暗殺

そして報復とばかりに何進の部下が十常侍を急襲したが
ある程度このことを読んでいた十常侍筆頭の張譲は

少帝弁と劉協を連れ都を逃亡していた

逃亡の途中、実行部隊の必要性を感じ董卓を味方に引き入れる
しかし董卓に裏切られ掌中の皇帝を奪われ殺害された

権力を握った董卓は次子である劉協を玉座につけ暴虐の限りを尽く
しているという

それに建前にして袁紹が動き始め、反董卓連合の結成をうながして

いた

そして参加の呼びかけは俺達のところにも届いた

「で、どうすんだ？俺達はこれに参加するのか？」

一方通行は桃香をはじめする将たちに質問した
一番に口を開いたのは桃香だった

「当然だよ！民を苦しめるなんて許せないよ！」

「桃香様の仰る通りです。力無き民にかわり、
暴悪な為政者に正義の鉄槌を食らわせなければ」

「悪い奴は鈴々がぶっ飛ばしてやるのだ！」

ずいぶんやる気な三人

一方通行は学園都市の闇に比べればまだましな方だと思っている
しかし闇を十分に知る一方通行はあまりこの状況を良しとは思っていないかった

学園都市でも置き去りやクローンたちがその闇によって殺されているのだ

（くそつたれが、どの世界でも闇に殺されるのは表の人間じゃねえか）

一方通行はこの世界にきて桃香たちと出会い、人を守るよさを知った
殺してきた罪を負う悪党ならではの方法で守りぬこうと決めていた
人を守るために人を殺すそんな悪党の美学を貫き通すと

「なら、決まりだ」

一方通行はそういつたが

「待ってください!」

軍師二人と星が反対の意を示した

「この手紙に不可解な点を感じるんです」

「軍師殿も同じか」

「はい。敵対勢力について書かれているとは言え、あまりに一方的過ぎるかと・・・」

「そ、それに洛陽に放った間諜が一人も戻ってきていないんです」

「どういうことだ!」

愛紗が驚きの声を上げる

「言葉通りです。だからこの連合に参加するのにはまだ賛成しきれていないんです。

私はこれには何か重大なと思うんです」

「しかし、仮に裏があったとしても民が苦しめられているのだぞ!」

愛紗が声を張り上げる

「その情報も間違いかもしれません」

「そこまでだア」

一方通行が白熱しかけた話し合いを終わらせる

「何かあつても、最悪の場合を想定すればそれだけは回避できるんじゃないねえのか？なら迷うこたアねえ。

最悪の可能性を想定しながら連合に参加する。異論は？」

「そうですね。そこまで考えておけば、いざという時にすぐ対応できますしね」

「なら、早速行動に移るぞ、全員、準備しろ」

こうして劉備軍は連合に参加することを決め動き始めた

第十話 反董卓連合参加！！（後書き）

小説をよくするために意見を募集しています
よろしくお願いします

第十一話 総大将、未だ決まらず

出撃準備が完了し、平原をでて一週間

劉備軍はようやく反董卓連合との合流地点に到着した

「ほわー……たくさん兵隊さんが居るねえ」

陣中の中は至るところに天幕が張られ、色とりどりの軍装に身を固めた兵士たちがたむろしていた

「さすが諸侯連合といったところでしょいか。
こうやって一同に会すると壮観ですね」

朱里が改めてこの連合の巨大さに関心していた

「ふむ、陣地中央の大天幕の位置になびく旗が、河北の雄、袁紹の旗か」

「その横に荊州・南陽の太守にして、袁紹の従妹にあたる袁術の旗……」

「あのちびっ子の旗もあるのだ！」

「その奥には……江東の麒麟児、孫策さんの旗も見えますね」

「西涼の馬騰さんに官軍に所属していた方の旗も、いくつか見受けられますね」

「あ！あっちにあるのは迫蓮ちゃんの旗だー！」

将たちは皆今後、これらの敵たちと戦うことを感じ
気を引き締め直していた

一方通行は特に關心したりもせず言った

「これだけ集まっちゃあいるが一年後にどんだけ
残っているやら」

一方通行に答えたのは朱里だった

「おそらく今後残ってくるのは、曹操さん、孫策さんは
確実に残るでしょう」

「袁紹や袁術は？」

愛紗が質問する

「袁紹さんや袁術さんはあまりこれといったことは
無いのでいまのところ判断できません」

「では馬騰殿は？」

「西涼は多数の民族の軍隊です。だからいつ内部分裂
を起こしてもおかしくないのだからいけません」

「要はとりあえず残った奴をつぶせばいいんだ」

一方通行がそうまとめると

金ぴかの軍装に身を包んだ兵士がやってきた
皆がこの装備を見て思ったことは

（趣味悪！）だった

「長の行軍、お疲れ様でございました！貴殿のお名前と
兵数をお聞かせ下さいますでしょうか！」

桃香が一步前に出て

「平原の相、劉備です。兵を率いてただいま参陣しました！。
連合軍の大将さんに取次ぎをお願いしますか？」

「はっ！しかし恐れながら現在、連合軍の総大将は
決まっておらずなのです・・・」

このことに一番に反応したの愛紗だった

「なに？総大将がまだ決まっていなないと？
どうということだ！」

「では、この場所に駐屯し、一体何をしているのだ？」

兵士の言葉に、おそらく全員が思ったであろう疑問を
星が代表して口にした時、

「総大将を決める軍議をしているのさ」

背後から、聞きなれた声が飛んできた

「迫蓮ちゃん！」

「よ、桃香。久しぶりだな」

「久しぶりだねー 元気だった？」

「お陰で、無病息災さ。・・・星も久しぶりだな。元気にしていたか？」

「ええ、伯珪殿もお元気そうで何よりですな」

「お前が抜けた穴を埋めるの大変だったんだからな」

少し迫蓮が疲れた風に言う

「おお。厭味を言われるなどと、成長されましたあ」

「ほざくな、バカ」

そんな軽い雑談をした後、本題に入った

「で、まだ総大将が決まっていってのはどういうことだ？」

一方通行が問いかける

「残念だが、事実なんだ」

「どういうことなのでしょう？やはり諸侯の主導権争いが泥沼化しているのでしょうか？」

朱里が一番考えられることを言う

しかし返ってきた答えはまったく逆だった

「一部を除いて、総大将なんて面倒な仕事はごめんだ
……という人間が殆どでな。軍議が進まん」

迫蓮が呆れた風に答える

「面倒なのはやだーって言ってるのなら、やりたい奴に
やらせば良いのだ。」

鈴々がもつともな事を言う

「実際そうなんだが、やりたそうにしてる人間が自分
から言い出さなくてなあ」

「……つまり、やりたそうにしている人間に押し付ける
つもりなのに、やりたそうにしている人間が立候補せず、
また他の諸侯も発言に対して責任を負いたくないから薦めない
……ということですか？」

先ほどの話を離里が簡単にまとめる

「その通り。……腹の探りあいでつかれるよ、ホント……」

迫蓮は疲れた表情を見せる

「チツ、面倒くせエ。軍議に乗り込むぞ、桃香来い」

黙って話を聞いていた一方通行は話を聞き終わると
桃香をつれて軍議に乗り込んでいった

第十一話 総大将、未だ決まらず（後書き）

感想、意見がらん待ってます

第十二話 総大将、決まる（前書き）

前の更新から遅れてすみません
では、どうぞ！！

第十二話 総大将、決まる

大天幕にてズカズカと入り込んだ一方通行
そして第一声が

「早く決めやがれ、くそども」

いきなり喧嘩越、当然それをみた諸侯は激怒する

「なんだ、お前達は！！」

「ここをどこだと思っている！！」

そんな非難の声しか飛んでこない
そこへある知った声が

「静まりなさい！争う前に早く総大将を決めるべきではなくて？」

その声の主は曹操だった

「そうだ、早く総大将を決めて進軍した方が良いのではないか？」

こうまでももつともな事を言われては静まるほかない
そこにやけに派手な衣装をまとった人物が話を進めた

「さて皆さん。何度も言いますがけれど、我々連合軍が効率よく兵を
動かすにあたり、たった一つ、足りないものがありますの。

兵力、軍資金、そして装備・・・すべてにおいて完璧な我ら連合軍。
而してただ一つ足りないもの。それは何でしょう？」

これが話の進まない原因の一つだった

この口調からすれば、袁紹が総大将になりたいのはバカでなければ誰でもわかる。さらには率いるのに必要な要素までも言い始め

明らかに自分しかないと言うような物言い。これでは押し付けたい諸侯だってこんなバカに総大将は任せられない

その裏づけとでも言うようにすべての諸侯が呆れた目でみている

さしもの一方通行でもため息が付きたくなってくるバカだ

一方通行は投げやりに

「そこのデカ金髪ドリルが総大将で良いんじゃないかア？それだけ言葉を並べたなら

お前はできるってことだろう？」

「だれがデカ金髪ドリルですのっ!!」

「まあまあ、落ち着いて。袁紹さんでいいじゃないですか。

総大将になりたいんですよ？」

桃香が静めながら説得すると

そうすると袁紹は勝ち誇ったように

「あらあら。この私がいつそんなことを言いました？だけど・・・

・・・そうですね。今の条件に一番あっているはこの私ですものね」

「なら決まりね。袁紹が総大将になりなさい」

他の諸侯もうんざりな様子で賛成し始めた

「我らもそれでよい」

「妾も問題ないぞよ」

「あらあら？皆さんそうなの？」

ニマニマと嬉しそうに笑った袁紹がウキウキと弾んだ様子で宣言した

「ならば決定ですわね。ではこの私……三國一の名家の当主であるこの私が、連合軍の総大将になってさしあげますわ」

「……………」

「……………」

袁紹の宣言に、諸侯たちが微妙な沈黙を提供する中
空気の読めない人が入ってきた

「…………おーい、まだ軍儀は進んでないのかー？」

気分転換をおえ、朗らかな笑顔と共に公孫賛が軍儀の席に戻ってきた

「いい加減、総大将を決めないと　　ってアレ？」

そこまで言うつと軍儀を包む不思議な空気に気づいたらしく、
迫蓮は気まずそうな表情で尋ねてきた

「どっなつてんだ？これ……」

「今、軍儀が終わったんだよ迫蓮ちゃん。袁紹さんが総大将になること」

に、みんな同意してくれたんだよ」

「おっ？そうなんだ。・・・んじゃ、ようやく本題に戻ることができるな」

「その本題も総大将である人が決めてくれることでしょうね。私は陣に戻るわ。決定事項は後ほど伝えてくれれば良いわ」

「私も自陣に戻らせてもらう。曹操殿と同様、作戦は後ほど通達してくれればそれで良い」

切れ味鋭く言い捨てると、曹操と眼鏡をかけた女性は軍儀から立ち去っていった

「何じゃあの二人は。身勝手にもほどがある」

横で小さいロングの金髪の子供が怒っていた

「俺も戻るぜエ。後は任せた」

「ええっ!!」

一方通行は桃香にすべてを丸投げにして自陣に帰っていった

「あーあ……。どうするんだ、本初」

「ふんっ。私に任せると言った以上、私の指示に従って頂きますわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1913m/>

一方通行が恋姫無双世界へGO！！

2011年9月4日16時11分発行